

“Young Goodman Brown”における宗教的人間観 について

長岡政憲

“Young Goodman Brown”は最初、1835年4月の *New-England Magazine* に掲載され、その後 *Mosses from an Old Manes* という短編集に収められている。Hawthorne は代表作、*The Scarlet Letter* において17世紀のニューイングランドのピューリタン社会を舞台とし、歴史上の実在人物を登場させ、当時の峻厳なピューリタニズムを浮き彫りにしながら、人間の心の罪に焦点を絞り、人間個人の心の奥に潜む罪と暗い心の真実を描き出し、罪から生じる人間の弱さや脆さに深い同情を寄せている。“Young Goodman Brown”も短編ではあるが、やはり17世紀のピューリタンの共同体の実在人物を扱い、キリスト教の原罪、罪の普遍性をテーマとしている点で最も Hawthorne の特徴を表わしている作品と言えよう。Terence Martin は“Young Goodman Brown”論の冒頭で、この作品は Melville によれば、ダンテのように深淵だとし、Hawthorne の最も深奥な作品の一つであって、“In the manner of its concern with guilt and evil, it exemplifies what Melville called the power of blackness in Hawthorne’s work.”⁽¹⁾ であるとしている。

この作品は Hawthorne の先祖が絡んでおり、イギリスから1603年にニューイングランドへ渡ってきた初代、William Hathorne はセイレムの厳格なピューリタンの有力者となり、クェーカー教徒を弾圧している。その息子 John Hathorne は判事として、1692年の有名なセイレム魔女裁判で、19人の女を魔女だとして処刑している。その時に処刑の対象となった Goody Cory, Goody Cloyse や Martha Carrier の実在名がこの作品の中で、魔女として登場している。これらの犠牲者の呪いがホーソンの家系を

包んでしまい、先祖の罪は決して償われるものではないと Nathaniel Hawthorne は、*The Scarlet Letter* の序章、“The Custom-House”の中で嘆いている。従って、“Young Goodman Brown”は1692年より少し前頃のセイレムの村という時代背景となっている。当時のピューリタンの信仰者達は彼らの生活の中に悪魔の存在を強く確信し、悪魔によって彼らの信仰を土台にして築き上げた政治や生活基盤というものが脅かされるものと考えていたのである。彼らの生活信条である聖書の中で、「魔術をつかふ女を生しておくべからず」という出エジプト記22章18節のイスラエルの民への神の律法を、彼らの神権政治の法として魔女狩りを正当化したのであり、宗教的異端者は政治的犯罪人として扱われ、人里離れた森で魔術的儀式を行ったり、そういう儀式がもとで不審な挙動を行うようになった女を魔女と決めつけ、拷問のあげく自白させ、処刑してしまったのである。

さて、この作品では森で悪魔に出会った Young Goodman Brown が人間の本性は悪でしかないと信じ切った後、村へ帰り人間が全く信じられない懐疑主義者となり、人生の終焉まで暗い陰鬱な生涯を送ったという結末になっているが、様々な観点からこの作品が論じられ、曖昧な結末のまま強烈な印象を与え続ける作品といえよう。

この小論では Hawthorne が主人公の Young Goodman Brown をめぐって何を印象づけようとしたかを考察したい。Hawthorne は Young Goodman Brown の人間的欠陥を指摘してはいるが、そうした欠陥を生み出したピューリタン共同体に彼は鋭い批判の矢を向けていること。また Goodman Brown の短絡的で偏狭な人間観を印象づけながら、一方で罪と悪の普遍性を強調しており、ニューイングランドの初期のピューリタンと同時に、あるいは Hawthorne と同時代の聖職者たちに罪の警鐘を鳴らしているのではないかという視点で作品を探ってゆきたい。

主人公 Young Goodman Brown はその名の通り、若くて善良な、ごく一般的な Brown という名の農夫で、Goodman には当時の一般的な夫という意味もあった。彼は Faith というアレゴリカルな名の若くて美しい新

妻との新婚三カ月の夫である。夕暮れ時になって、可愛い Faith が帽子にピンクのリボンをつけ、悲しそうな顔をして今夜という今夜だけはどうしても一緒にいて欲しいと懇願するにも拘らず、彼は、今夜だけはどうしてもおまえから離れて一晩の旅に出かけなければならないと言って、敷居を越えて夜の森へ出かける。その時 Faith は、'A lone woman is troubled with such dreams and such thoughts that she's afraid of herself sometimes.'⁽²⁾「女が一人いると、時には自分自身が怖くなるような色んな夢や空想で惑わされますわ。」として、不安な女心を夫に言い寄っているが、Goodman Brown の方は新婚三か月というのに、もう自分を疑っているかと妻をたしなめて、自らの邪悪な思いを気づかせまいとする。

さて森についての様相として、forest の場合、「隠れ場所：森(=肉体)の中には、一角獣(=精神)と白い雌ジカ(=魂)が隠れ住む。」とあり、文学の項では、「ダンテ：『地獄篇』の「暗黒の森」selva oscura は、「誤謬と眠りの森であり、幻想界へ入ることを表す。」⁽³⁾とイメージされている。Hawthorne がこの作品で扱う森は、人間の心の象徴とも考えられ、ピューリタン共同体の中では禁じられた行為や日頃社会生活で抑圧されている欲望とか衝動が自由奔放に躍動する場となり得るのである。Randall Stewart は、"Trees, individually and collectively, are interesting symbols. The forest, to the early New England Puritans, was a symbol of evil. It was a place of darkness and danger. Witch-meetings were held there."⁽⁴⁾と述べており、ピューリタンたちにとって、森は神の光の届かない邪悪な荒野として悪魔が凄み、魔女たちの集会が行なわれた不倫の場である。The Scarlet Letter の若い Dimmesdale 牧師が、若い人妻 Hester の美しくて豊満な肉体に魅せられ、姦通という誤ちを犯してしまったのも森であり、理性の抑圧から解放された自然の森では、信仰の良心や自分の地位や身分を犠牲にしても自己の欲望を抑制できないのである。Claudia D. Johnson は、"Instead, the joys of marriage have created a disjunction within one who fears the evils of the flesh. What had once been merely an 'inclination' to carnality has become overt in the consummation of his marriage."⁽⁵⁾と

鋭く指摘しているように、Goodman Brown の場合も新婚三か月にして性の快楽を知った彼は更によしまな情欲が生じ、愛する Faith との新婚家庭の暖かさと祝福の垣根を自己の欲望のために敢えて超えようとするのである。この作品の森の役目は、人間の心の邪悪な面の象徴としての森と、ピューリタンたちの信じるところ、悪魔が棲み、魔女たちが集会に集まる場として描かれていると思われる。悪魔に唆されてアダムとイヴが神との約束を破り、善悪を知る禁断の実を食べた墮罪の如く、Goodman Brown も森に入り込むことによって、人の心の奥の聖域を覗くことになり、森の悪魔の淫らな性の集会へと引き寄せられてゆく。Hawthorne は “The Haunted Mind” という作品の中で、

In the depths of every heart, there is a tomb and a dungeon, though the lights, the music, and evelry above may cause us to forget their existence, and the buried ones, or prisoners whom they hide. But sometimes, and oftenest at midnight, those dark receptacles are flung wide open.

と述べているが、これは Goodman Brown が新妻の Faith を置いて、なぜ邪悪な森の一夜の旅に出たのか。不幸な彼の結末から見てその疑問が当然起こるが、その疑問に対しての Hawthorne の考えが窺えるようである。彼が森へ行く必然性は彼が森で悪魔と対決し、可愛い Faith が悪魔と遭遇する必然性を恐れたからでもなく、ヤコブ書 1 章 14、15 節に「人の誘はるは己の慾おのれに引かれて惑よくさるるなり、欲よくほら孕みて罪を生み、罪成りて死を生む。」とあるように、あくまで悪魔の外的な誘惑に対し、Goodman Brown の内的な呼応によって引き起こされたものと考えられる。

Faith に別れを告げた Goodman Brown はセイレムの村の教会を通り過ぎ、見送る妻を振り返りながら、自分は可愛い妻を残し、悪魔のいる森へ行くなんてなんと邪悪な男だろうと考えるが、 ‘ . . . , she’s a blessed angel on earth; and after this one night I’ ll cling to her skirts and follow

her to Heaven.’⁽⁷⁾「彼女はこの世の祝福された天使なんだ。この一夜が終れば、彼女のスカートにへばりついて一緒に天国まで行こう。」と自己弁護をする。Faith と Goodman Brown のやりとりはここで終わってしまうが、彼にとって Faith の存在は、“She is the tie to earth and heaven in that she is both ‘angel and sexual partner’, she embodies the flesh as well as the spirit.”⁽⁸⁾ と Claudia D. Johnson が評しているように、heaven という語によって、新婚の彼が性の快楽という地上での悦楽の天国と、もう一方、Faith は信仰のアレゴリーと考えられるために、邪悪な情欲の罪に一夜だけ陥ってみるが、その目的が終ると信仰に立ち返り、a blessed angel である妻と共に神の国へ昇天できるという安易さが見られるのである。

Goodman Brown は邪悪な目的も一晩限りと決断して暗い淋しい森へ入ってゆく。森の小道は陰鬱極まりない木々によって暗く、奥に踏み込んでゆくと、一本の古い木に腰を下ろした50才位の重々しく上品な服装をした男の姿が現われ、Goodman Brown が遅れて来たことを指摘する。従って Brown とその男は以前から会う約束をしていたことが明らかになる。それに対し、Goodman Brown は ‘Faith kept me back a while.’⁽⁹⁾「フェイスにしばらく引き止められましたね。」と弁解するが、Brown は妻、Faith の手を振り切って悪魔の森へ入った行為が、同時に彼の精神世界の支柱である「信仰」に背反し、心身共に神の祝福から悪の世界へと落ち込む結果になるとは気づかなかったのである。

その男は服装も様子も Goodman Brown にそっくりだが、手には生きた蛇が巻きついていてと思われるような杖を持ち、Goodman Brown の歩きぶりが遅いのでこの杖につかまれと促すのである。staff「杖」の意味するところは「導きを表す。」また「棍棒と同じく王の武器である。」⁽¹⁰⁾とあり、この男が暗黒の森の導き主としての印象を与えている。少し怖じ気づいた Goodman Brown はこの森でこの男と会うという約束を果たした故、妻のもとに戻りたいと動揺し、こんな暗闇の森の奥深くまで足を踏み入れて、自分の父親や祖父も善良で立派なキリスト教徒だったので、自分だけが邪悪な森へ入り込んでしまったことを嘆くのである。この杖を持っ

た男は実は人の心を読み取れる悪魔であり、Goodman Brown の家系のこととはよく知っており、彼の祖父がクエーカー教徒を迫害した際には加勢したと言い、King Philip の戦争（1675—76年）、つまり北米インディアンの頭の King Philip がニューイングランドの移住民に起こした戦いの際も、インディアン部落に放火するために Goodman Brown の父の手助けをしたなどと言っている。更にこの悪魔は、ニューイングランドでは顔役で、沢山の教会の執事たちと聖餐式のぶどう酒を一緒に飲み、州議会の大多数の人々がこの悪魔の支持をしてくれる人達だと Goodman Brown に迫ってくる。彼は驚きながらもこれ以上森の奥に進むとセイレムの善良な老牧師に合わせる顔がないと言い返すが、悪魔は体を震わせながら笑い飛ばしてしまう。Goodman Brown は自分には最も信頼している妻の Faith がいるとやり返すと、悪魔は杖で、Goodman Brown に教理問答を教えてくれた敬虔な貴婦人である Goody Cloyse の姿を見せたのである。この女性は先に触れたように、1692年の魔女裁判で、Hawthorne の先祖、John Hathorne に死刑の宣告を受け、処刑されている。彼女は Goodman Brown の祖父にそっくりの姿の悪魔を知っており、親しく話し始め、同じ魔女の Goody Cory に自分の魔法のほうきを盗まれたなどと言っている。Goody Cloyse は今夜の集会には若くて素敵な男性が連れて来られるので急ぐからと言いついて、淫らな様相で悪魔の杖を借りてその場から消えてしまう。悪魔が Goodman Brown の祖父にそっくりの姿に変装しているが、悪魔の変装については、当時のピューリタンたちの間でも明らかにされており、“In June 1692, a more explicit clarification of the spector question was issued by a group of Puritan clergyman; in a statement probably written by Cotton Mather himself, the devil is acknowledged as having the power to impersonate innocent people.”⁽¹¹⁾ とあるように悪魔は無垢な人間に扮してその役を演じる力があるとされていた。

魔女の姿を目の当りに見た Goodman Brown は道の暗い窪地のところまで来たが、木の切り株に座り込み、これ以上は奥に進まないと言いつくと、悪魔は彼を落ち着かせ、自分の杖を渡すとその場から姿を消してしま

う。この時、Goodman Brown は躊躇わずに愛する妻、Faith のもとに急いで帰れば安息できたであろうに、ほんの数分にしても、純粋で可愛い妻の腕の中で今から帰って静かに寝入ることができるなどと愉快的瞑想に耽っている。そんな最中に馬の蹄の音が響き、木の影から彼は、尊敬する牧師と執事が馬に乗り、何やら話し合っている様子を聞く。馬上の二人は今夜の集会について、インディアンの優れた呪い師^{まじな}が来ること、更に可愛い若い女性が連れて来られるので急ごうと言って馬を走らせて消えてしまう。

さて、ピューリタン共同体の教会で、模範的な信仰者の貴婦人と思われていた Goody Cloyse が若い男性に情欲を燃やし、夜の森の集会に急ぎ、更にセイレムの教会の牧師と執事が若くて美しい女性を求めて邪悪な集会へ馬を走らせる姿は、この作品の罪のテーマを効果的にしている。単なるピュータリン聖職者に対する懐疑的な見方というよりも、聖職者を含む全ての人間の心の奥に潜む罪の姿を映し出し、最も崇高な筈の牧師や執事の罪を描くことにより、当時のピューリタンたちの偏狭な宗教観を批判していると思われる。Hawthorne のこのような態度は、*The Scarlet Letter* において顕著に見られる。姦通罪としてピューリタン共同体から処罰を受け、白眼視されている Hester が、敬虔な牧師や判事の側を通るとき、彼女の胸につけた姦通の A の緋文字は感応し、同じような罪が聖職者の心の奥にも潜んでいることを印象づけている。また、姦通の相手である Dimmesdale 牧師が説教壇から自分は最も惨めな罪人だとだけ語ると、その内容を全く考えようとしなない教会員は、皮肉にも彼をますます崇め立て、この人こそこの地上の最も聖い聖人だと思ひ込んでしまうような態度である。

Goodman Brown は牧師や執事までが邪悪な森へ踏み込み、淫らな会話を交わしているのに落担し、失望しながらも彼は天を見上げ、*‘With heaven above and Faith below, I will yet stand firm against the devil!’*⁽¹²⁾

「頭上には天国があり、地上にはフェイスがいる。悪魔に対抗して自分は堅く立ち上がるのだ。」と残された自らの信仰の望みを頼りに苦悩に満ちた声で、“Faith! Faith!” と惨めな様子で妻の名を叫ぶ。すると空から Faith が頭につけていた筈のピンクのリボンがふわふわと舞い落ちて木に

ひっかかるのを見た彼は呆然とし、‘My Faith is gone! . . . There is no good on earth; and sin is but a name. Come, devil! for to thee is this world given.’⁽¹³⁾「僕のフェイスが行ってしまった。この地上には善というものは無くなったのだ。罪といたって、名前だけのものになってしまった。悪魔よ、出て来い。なぜなら悪魔にこの地上は与えられたのだから。」と絶叫し、絶望し切って狂人のようになった Goodman Brown は、悪魔に渡された杖を握むと、走るというより森を飛んでいるような速さで森の奥へ進んでゆく。森の恐ろしい騒めきや野獣の吠える遠吠えの中で、狂ったように杖を振りかざし、悪口雑言を叫び散らし、悪魔にとりつかれた Goodman Brown の顔ほど恐ろしいものはなく、“The fiend in his own shape is less hideous than when he rages in the breast of man.”⁽¹⁴⁾「悪魔は外に姿を現わしている時よりも、人間の胸の中で暴れ狂う時程恐ろしいものはない。」と Hawthorne は注目すべきことばを述べているのである。Goodman Brown は崇拜する教会の聖職者たちや妻までもこの邪悪な森に来ていと分り、短絡的にこの世は悪魔の支配下だと信じ込んだが、ピューリタン共同体の中で教理問答を教えられ、峻厳な教会生活を送ってきた彼の信仰は浅薄なものと言える。彼はピューリタン共同体の指導者達は崇高で、全く罪のない聖人と教えられてきたのであろうか。ローマ書のパウロの書簡には、「義人なし、一人だになし、聴き者なく、神を求むる者なし。みな迷ひて相共に空しくなれり、善をなす者なし、一人だになし。 . . . 』とあるが如し。 . . . 律法の行為によりては、一人だに神のまへに義とせられず。 . . . 」とあり、「然れど聖書は凡ての者を罪の下に閉じ籠めたり。」⁽¹⁵⁾と宣言している。当時のピューリタンの信仰者も全ての人間の罪は認識していた筈であろうが、彼らの偏狭な宗教観、人間観に批判的な Hawthorne は極端な形でピューリタンの善人、Goodman Brown を描いたのではないかと思われる。

Goodman Brown は森の中の木々を切り開いた広場の悪魔の集会にとりやってくる。そこは教会を思わせるように岩でできた説教の祭壇があり、周囲に四本の松が先端だけが燃えているが、祭壇の岩の上には積まれ

た木の葉が燃えて夜空を焦がしていた。その集会には知事夫人や高貴な婦人達、それにセイレム村の教会員達や尊敬する牧師や執事も来ており、彼らは讚美歌を歌っているのであるが、その歌詞は悪や罪を謳歌していた。悪魔の宗教へと誘われ、Goodman Brown が前へ歩み出したとき、牧師と執事が彼の腕を握み、彼を燃え盛る岩の祭壇へ連れてゆく。すると黒いマントを着た悪魔が人間の為せる邪悪、且つ淫らな罪の所業を並べ立て、罪を奨励するような悪の説教を始める。そうして 'Evil is the nature of mankind. Evil must be your only happiness.'⁽¹⁶⁾「悪こそが人間の本性だ。悪こそが諸君の唯一の幸福なのだ。」と訴える。悪魔の導きによって、Brown はその集会に来ていた Faith と汚らわしい祭壇の前でお互いに顔を見つめ合い、無言のままであるが、彼らには燃える火の赤く染った水か、それとも血を思わせるような赤い水の洗礼を授けられる準備が整えられた。ここで Hawthorne は、もう一度二人が見つめ合うと、自分達がどんなに汚れてやましくなっているかがお互いに分かるだろうし、二人が暴かれた姿と今見合った顔に対し、どちらも身震いするだろうと語っている。悪魔のこの洗礼が何を意味しているか。Hawthorne は、

Herein did the Shape of Evil dip his hand and prepare to lay the mark of baptism upon their foreheads, that they might be partakers of the mystery of sin, more conscious of the secret guilt of others, both in deed and thought, than they could now be of their own.⁽¹⁷⁾

「悪魔はこの中に手を浸し、二人の額に悪の洗礼の印を授ける用意をしていた。悪の奥儀にあずかることによって、自分の罪以上に他人の隠された罪に対し、その現われた罪の行為にも、また心に思っている罪の両方を一層感知するようになるのである。」

と解説している。この内容については、アダムとイヴが禁断の実を食べ、お互いの裸の姿、つまり罪の姿を知り、エデンの園から神に追放された墮

罪以上に、Hawthorne は、Dimmesdale の罪を察知するために Chillingworth が無断で部屋に入り、寝ている Dimmesdale の衣服の胸を開け、Dimmesdale の心の聖域を踏み越えた Chillingworth の罪を、“the Unpardonable Sin”（許されざる罪）として、Chillingworth が悪魔化したものとして扱っていることを想起させる。Goodman Brown と Faith にとって、悪魔の洗礼を受けることは信仰を棄て、全く悪魔に魂を売り渡し、悪魔の仲間入りを意味するのである。Goodman Brown は追い詰められて、*‘Faith! Faith! . . . Look up to Heaven, and resist the Wicked One!’*⁽¹⁸⁾ 「フェイス、フェイス、天を見上げるんだ。そして悪魔に抵抗するんだ。」と叫び終えるや否や、これまで見えていた光景は幻影の如くすっかり消え去り、風の唸り声が消えてゆく中で Goodman Brown だけが夜の森にひとり残される。

翌朝、一夜の夢のような旅を終えた Goodman Brown はセイレムの村に戻ってくるが、Hawthorne はこの一夜の森の旅を *“Had Goodman Brown fallen asleep in the forest and only dreamed a wild dream of a witch-meeting? Be it so, if you will. But, alas! it was a dream of evil omen for young Goodman Brown.”*⁽¹⁹⁾ 「グッドマン・ブラウンは森の中で眠り、そして魔女の祭典という邪悪な夢を見ただけなのだろうか。そう思いたければそう思ってもいいのである。しかし、それは若いグッドマン・ブラウンにとっては不幸な前ぶれを告げる夢だった。」として、現実のものとも夢とも幻とも明確にせず曖昧なままに残している。

さて、朝になって村へ戻って来た Goodman Brown は教会の老牧師とすれ違った時、呪いを避けるかのように逃げ出し、Goody Cloyse が、朝のミルクを持って来た女の子に教理問答を教えていると、彼女の手から女の子をもぎ取り、更に通りからピンクのリボンをつけた妻の Faith が喜んで駆け寄って来ても、彼女の顔を厳しい目つきで悲しそうに見て挨拶もせずに通り返してしまふ。彼は一夜にして全く悲観的な憂鬱人間に変わってしまったのである。教会の讃美歌は彼の耳には罪を讃える歌として響き、牧師の熱烈で雄弁な説教を聞いた彼は顔色を青くし、神を冒瀆する牧師の上

に、そして会衆者一同の上に教会の屋根が崩れ落ちるのではないかと心配する。また彼はしばしば夜、突然目を覚まし、Faith の胸から身を引いて離れてしまい、家族の祈りの時には何やら咬きながらしかめ面をする仕末となった。Hawthorne が Goodman Brown の森の一夜の経験^{つら}を夢だと考えるような幕切れにし、彼の見た光景は幻影の如く消えたが、しかし Goodman Brown にとっては到底夢とは考えられなかったのである。Terence Martin は Goodman Brown の身に振りかかった責任は彼の森へ踏み込む動機にかかっているとし、“For Goodman Brown deliberately leaves his place in the mortal universe and is incapable of regaining it.”⁽²⁰⁾と考えている。また Neal Frank Doubleday によると、Goodman Brown が悪魔の集会に参加するために夜の森へ行った意識について、“—fully awake and aware of his intention—”⁽²¹⁾であり、森への Goodman Brown の旅によって、アレゴリカルに顕わされたものは、そのような決断による霊的な結果であるとし、現実に対する疑惑感^{おそ}はアレゴリーの重要な提示だと述べている。一時的にしる悪魔に身を委ね、その後再び高潔な生活に戻ろうとする場合、罪意識の深い Hawthorne はヘブル書 10 章 26, 27 節、「我等もし真理を知る知識^{いけいよ}をうけたる後、ことさらに罪を犯して止めずば、罪のために犠牲^{いけいよ}もはや無し、ただ畏れつつ審判^{さばき}を待つことと、逆^{さか}ふ者を焚きつくす烈しき火とのみ遺^{のこ}るなり。」を思い浮かべることであろう。そのような背景があれば、Hawthorne が Goodman Brown の心の中に、一夜にして極端な心的変化が起きたことを読者に印象づけたのも肯けることである。

森の一夜の悪魔との出会いはこの世に悪しか存在しないことを Goodman Brown に教えたのであるが、善良で全く無垢な彼は、ピューリタン共同体の信仰者、特に聖職者や指導者に至っては悪とは無縁の高潔な聖人と信じ込んでいたからである。Goodman Brown は自らの心に問い直すならば、新婚三カ月にして、不義の情欲に駆られて悪魔の誘惑に応じ、邪悪な目的と自覚しつつ、他の信仰者の邪悪さを知らされながら悪魔の集会に来てしまったのである。しかし自らの罪に気づきながらも、聖職者を汚れ

ない聖人と信じたときには、同じ信仰者の内在する罪を認識するだけの余裕もなく、自らの心の奥底に潜む邪悪な欲望というものが悪魔によって明確にされるや否や、他者のその欲望が憎悪の対象と化し、その邪悪な罪が人間全てを汚していると決めつけ、聖者でなければ全て汚れた悪魔の手下だと短絡的に信じ込んでしまう人間観、宗教意識しか持ち合わせない陰気な懐疑主義者となったのである。辰己慧氏は、Goodman Brown の森の経験の後の拒否反応や憎悪の感情に対し、「恐らくホーソンは『なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある^{黒い}穢れを認めないのか』（マタイ7章3節）という聖句を思い出していたことだろう。』⁽²²⁾と述べている。確かに村へ帰った Goodman Brown は自らの心の邪悪な罪を見るより、他者の善は見ないで、森で見た幻の人物と現実の人物とを全く同一視している。

Goodman Brown は悲観的な懐疑主義のまま年老いてゆき、彼の葬式の時には妻や子や孫たちに見送られるが、彼の墓石にはその死際があまりにも暗く、希望のある言葉が刻まれなかったとしてこの話を終えている。Waggoner は、“Young Goodman Brown is unable to understand or accept the evil revealed to him in the forest of the soul, . . .”⁽²³⁾とし、その長い残りの生涯を gloomy alienation だとしており、Becker も Goodman Brown の持つ信仰というものは、悪魔を冷静に見ることのできないものであり、悪魔と立ち向うなら捨てざるを得ないと彼が感じている程度の信仰であるとしている。それは彼の精神的支柱が神に対する信仰ではなく、ピューリタン共同体の牧師であったり、最終的にも妻の Faith であり、彼が Faith を口にするときには「信仰」を意味せず、「妻」の存在に信頼を寄せていたからである。

このように Goodman Brown の人間観の欠如について指摘したが、この小論を結論づけるにあたり、ピューリタン共同体について考えたい。一夜の森の旅に出る前の彼は確かに若くて未熟であり、厳格なピューリタンたちの中で、疑うことを知らない「善人」であった訳で、森の悪魔の集会を知って全くの孤独と不信の人間と化したが、彼をそのような人間にした

のは、心に潜むよこしまな情欲が決定的な要因ではなく、藤川玄人氏が指摘しているように、「よこしまな情欲や脆さが凡ての人間にあるという現実を認め得ぬ偏狭な心」⁽²⁴⁾である。善と悪、聖と邪悪なるものの両面を持ち合わせているのが人間の本性であるが、何故 Goodman Brown のような偏狭な人間観が育ってしまったのであろうか。Becker は、

Brown is the representative Puritan who must go through the basic human encounter with evil It is the unavoidable crisis in human maturation. We are given here, in other words, not the tragedy of a man who has chosen to look at evil, but the destruction of a man whose Puritan faith is unequal to the inevitable encounter with evil In him we see the helplessness of Puritan faith to deal successfully with the universality of evil. What Hawthorne is saying is that to those who insist, as do the Puritans that the world be seen as black and white, blackness is the vision that will prevail. The fault is with the Puritan view of life, not with the strength of the hero.⁽²⁵⁾

としている。Hawthorne は Goodman Brown の人間観や信仰を非難していた訳ではない。彼は17世紀末当時のピューリタニズムに目を向け、人間の弱さや脆さ、罪の誘惑に陥り易い人間の本性を容認しようとせず、教会は教理問答、習慣的礼拝を重んじ、異端者や非キリスト教的な要因を排斥することに専念し、且つそれを立法化していたピューリタン共同体の、権威的な戒律主義に問題があることを浮き彫りにしていると思われる。Hawthorne の描く *The Scarlet Letter* の17世紀のピューリタンたちの代表者はまさに戒律主義であり、彼らの権威主義的な偏狭な宗教観が、罪を犯した人間に悲しい苦悩を強いており、罪の許しの救済は全く見られない程である。

“Young Goodman Brown” で最後に注目したいのは、悪を人間の本性だと信じ込み、孤独と人間不信の暗い生涯を終えた主人公は、彼の希望のない墓石のことが示す通り、はたして地獄へ落ちていったことを Haw-

thorneは暗示したのだろうか。森から帰った後の Goodman Brown の言動は確かに教会の聖なるもの、善なるものに絶望し、拒否している。彼は聖職者やピューリタンたちの信仰生活を拒否したけれども、その拒否行為は彼らを悪魔の手下だと信じ込んだためのものであり、神の神聖と絶対的な神の力に対しては恐れおののいていたのである。つまり一夜の森の旅によって彼の人間観は全く変わってしまったが、悪魔の洗礼を受ける直前に、‘Faith! Faith! . . . Look up to Heaven, and resist the Wicked One!’と叫んだ結果、その場の光景は幻のように消えた筈で、漠然と天、つまり神を仰いで発したこの言葉によって悪魔の仲間入りすることなく、家路に着けたのであるとも考えられる。従って彼がその後いかに陰鬱な生涯を送り、その死際に暗くとも、その魂が地獄へ落ちたと結論づけるのもまたやや短絡的だと思われる。つまりそれは曖昧であって結論づけるのは無理ではなからうか。ただ Hawthorne は、姦通によって結ばれた Dimmesdale と Hester の愛の結末を、彼らの死後二人の墓には隔たりを置き、二人が結び合わせられなかったことを暗示したように、罪の及ぼす影響力を死の究極まで波及するものとして問題視する彼の姿勢を見逃してはならないのである。Johnson が Goodman Brown の情欲について、“ . . . he sees the flesh as demonic and irreconcilable with spirit. Because the flesh cannot be wed to the spirit . . . ”⁽²⁶⁾ と述べているが、これはローマ書 8 章 6、7 節、「肉の念おもひは死なり、霊の念おもひは生命いのちなり、平安なり、肉の念おもひは神さかに逆ふ . . . 」と、ガラテヤ書 5 章 17 節、「肉の望むところは御霊にさからひ . . . 」のことを引き合いに出していると思われるのであり、恐らく Hawthorne の意識の中に肉欲の罪について鋭敏な罪意識があったと思われる。

最後に、Hawthorne が 17 世紀のピューリタンを描くとき、彼の批判の目はその時代のピューリタニズムにだけ集中したのだろうか。Hester の姦通の結果、罪の子として考えられる Pearl と、母親 Hester を一方的に引き離そうとしてピューリタンの指導者たちが強引に迫ったとき、Dimmesdale は母と子の神聖な関係を切り離してはならないと説得している。つまり神

がこの母親に Pearl を授けたのだとの主張が説得力のあるものとなって、Wilson 老牧師に対抗し得たのである。罪を厳しく責めるピューリタンの指導者達も、民衆に贅沢品を禁止しながら自分達の屋敷には英国から持ち込んだ豪華な家具や骨董品を揃えているのである。ピューリタン共同体の民衆の多くは、姦通罪の Hester に冷酷で、若い牧師の Dimmesdale をこの世の聖人と崇め、極端な程の偏狭な人間観しか持っていない。Dimmesdale の罪による苦悩の末の身体の衰弱に対しても全く見当違いの思索である。Hawthorne は直接、19世紀の彼の同時代の宗教家たちを批判してはいないが、19世紀に生き、そして17世紀のピューリタンを批判している以上、彼の同時代の人々の宗教意識に無関心でいたとは考えられない。

柳生望氏が Hawthorne の宗教意識について述べている中で、

「しかしホーソンの時代の教会員はそれをなくしてしまったのである。悪魔の集會に集まった牧師、役員はホーソンにとっては当代の低調な宗教レベルを示しているのであろう。浅薄な罪意識をもった当時のリベラリズムに対して、彼は罪がすべての人の心を汚していることを認め、ピューリタンの独善主義をただし、罪の普遍性に基づく、兄弟愛を説いている。」⁽²⁷⁾

と語っている。Hawthorne は Goodman Brown の生涯を暗く陰鬱にすることによって、Goodman Brown が悪魔に支配され、地獄に落ちることを暗示しようとしたのではない。17世紀の偏狭で独善的なピューリタンに批判の矢を放つと共に、“The Minister’s Black Veil” の Hooper 牧師が黒いベールで顔を覆い、全ての人間に宿る罪を指摘し続ける存在となったように、“Young Goodman Brown” によって、Hawthorne の当時の世俗的な教会の聖職者たちに対しても、罪と悪魔の存在を意識的に印象づけようと、警鐘を鳴らしているとも考えられるのである。

Notes

- (1) Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (New Haven, Conn.: Twayne Publishers, Inc., 1965), p.89.
- (2) Nathaniel Hawthorne, *Mosses from an Old Manse*, ed. William Charvat and others, (Ohio State University Press, 1974), X, p. 74. 以下このテキストを *M. O. M.*, とする。
- (3) アト・ド・フリース著 山下主一郎主幹他訳『イメージ・シンボル事典』(大修館, 1984) p. 260.
- (4) Randall Stewart, *American Literature & Christian Doctrine* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1958), p. 45.
- (5) Claudia D. Johnson, *The Productive Tension of Hawthorne's Art* (Alabama, The University of Alabama Press, 1981), p. 33.
- (6) Nathaniel Hawthorne, *Twice-told Tales*, ed. William Charvat and others, (Ohio State University Press, 1974), IX, p. 306.
- (7) *M. O. M.*, p. 75.
- (8) 注(2)の文献と同じ。p. 33.
- (9) *M. O. M.*, p. 76.
- (10) 注(3)の文献と同じ。p. 600.
- (11) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (Boston, Mass.: G. K. Hall & Co., 1979), pp. 334—335.
- (12) *M. O. M.*, p. 82.
- (13) *Ibid.*, p. 83.
- (14) *Ibid.*, p. 84.
- (15) ガラテヤ書 3章22節.
- (16) *Ibid.*, p. 88.
- (17) *Ibid.*, p. 88.
- (18) *Ibid.*, p. 88.
- (19) *Ibid.*, p. 89.
- (20) 注(1)の文献と同じ。p. 93.
- (21) Neal Frank Doudleday, *Hawthorne's Early Tales, A Critical Study* (Durham, North Carolina: Duke University Press, 1972), p. 209.
- (22) 辰己慧著『ホーソンの人間論』(晃洋書房, 1984) p. 99.
- (23) Hyatt H. Waggoner, *The Presence of Hawthorne* (Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1979), p. 14.
- (24) 藤川玄人著『共同体とホーソーン』(弓書房, 1982) p. 86.
- (25) John E. Becker, *Hawthorne's Historical Allegory* (Port Washington, N.

Y.: Kennikat Press, 1971), pp. 18-19.

(26) 注(5)と同じ文献。p. 33.

(27) 柳生望著『アメリカ文学にみるピューリタニズムの遺産』（ヨルダン社、1984）p. 120.

本文中のテキストの訳文は、辰己慧著『ホーソン短編集・解説と鑑賞』（大学社、1982）を一部参照にした。